

あめわかひこ

むかし、ある長者ちやうじやの家の前の小川で、召し使いの女がせんたくをしていました。そこへ、大きなへびがあらわれて、

「わたしのいうことを聞かなければ、おまえを巻きこころしてしまうぞ」といいました。

召し使いは、おどろいて、

「わたしにできることなら、何でも聞きます」と答えました。すると、へびは、口から手紙をはき出して、

「この手紙を主人にわたすのだ」といって、するするどこかへ行ってしまうました。

召し使いは、手紙を長者の所に持って行きました。長者が、急いで開いてみると、手紙には、こんなことが書いてありました。

「おまえの三人娘のうち、ひとりをわたしによこせ。よこさなければ、おまえもおまえの妻もと殺してしまうぞ。ある池の前に間口まぐちが十七間けんある屋敷を作って、そこに娘を連れて来るのだ」

長者は、上の娘をよんで、へびの所に行ってくれないかとたのみました。上の娘は、「あれ、とんでもありません。殺すといわれても、へびの所へはまいりません」といいました。

そこで、二番目の娘をよんでたのみましたが、やっぱり、

「とんでもありません。殺すといわれても、へびの所へはまいりません」とことわりました。

長者は末の娘をよびました。一番かわいがっていた娘なので、長者は泣きながら、へびの所に行ってくれないかとたのみました。末の娘は、

「父さんや母さんがとり殺されるくらいなら、わたしはへびの所に行きます」といいました。

長者は、へびにいわれた池に、十七間の間口の屋敷を作りました。そして、ある晩、娘を屋敷に連れて行って、娘ひとり残してみな帰りました。

夜がふけると、風が吹き、雨が降ってきて、かみなりが鳴り、池の水が高く波立ちました。娘は、恐ろしくて、生きた心地もしませんでした。そこへ、屋敷がいつぱいになるほどの大きなへびがあらわれました。へびは、

「恐がることはない。あなたは、刀を持っていますか。それでわたしの頭を切り落としてください」といいました。娘は、小さなはさみしか持っていないんですが、それでへびの首を切ると、すぐに頭は落ちました。そして、へびの中から、りっぱな若者が走り出てきました。

娘は、若者と、幸せに暮らし始めました。若者は小さな唐櫃からびつを持っていて、入り用なものはなんでも、その唐櫃から取り出しました。

あるとき、若者はいました。

「わたしは、じつは竜宮の王なんだが、天上の世界に出かける用ができたのだ。七日たったら帰って来るつもりだけれど、もし帰って来られなかったら、十四日間待ってくれ。それでも帰れなかったら、二十一日間待ってくれ。それでも帰らなかったら、もう二度と帰れないものと思ってくれ」

娘は、

「もし二十一日たってもお帰りにならなかったら、わたし、どうしたらいいんでしょう」とききました。若者は、

「西の京に女がいて、ひと夜ひさごという、ひと晩で大きくなるひょうたんの種を持っている。それを買って取って、庭にまき、そのつるをつたって昇ってきておくれ。天に着いたら、道で会う者たちに『あめわかひこはどこにいますか』とたずねておいで」といいました。そして、「この唐櫃は、どんなことがあってもけっして開けてはいけないよ。もし開けたら、わたしは帰って来られないからね」といって、空へ上って行きました。

しばらくすると、娘のふたりの姉さんが、妹に会いに、屋敷にやって来ました。姉さんたちは、屋敷のすばらしいようすにおどろき、あちこちの部屋を開けてみました。そのうち、あの唐櫃を見つけて、開けてみようと思いました。娘は、

「これは開けてはいけないのです」といいましたが、姉さんたちは、

「見よう、見よう」といって、娘からかぎを取り上げて、開けてみました。唐櫃の中は何もなくて、ただ、けむりが空へ上って行きました。姉さんたちは、

「なんだ、つまらない」といって、帰って行きました。

二十一日たちましたが、若者は帰って来ませんでした。娘は、若者にいわれたとおり、西の京の女から、ひと夜ひさごの種を買って取って来て、庭にまきました。そして、つるを上って行きました。

空に上って行くと、白い着物を着た美しい男の人に会いました。娘が、

「あめわかひはどこにいますか」とたずねると、男の人は、

「さあ、わたしは知らないねえ。先へ行ってほかの人にきくといい」といいました。娘は、

「あなたはどなたですか」とききました。

「ゆうづつ。よいの明星だよ」と、男の人は答えました。

娘は、先へ進んで行きました。すると、ほうきを持った人に会いました。

「あめわかひはどこにいますか」と、娘がたずねると、その人は、

「わたしは知らないねえ。先へ行ってほかの人にきくといい。わたしは、ほうき星、すい星だよ」といいました。

また先へ行くと、たくさんの人が集まっていました。

「あめわかひはどこにいますか」と、娘がたずねると、その人たちは、

「さあ、知らないねえ。先へ行ってほかの人にきくといい。わたしたちは、すばる星だよ」といいました。

娘は、出会う人たちがみなこんなでは、夫に会えないのではないかと、心細く思いながら歩いて行きました。すると、りっぱな美しい輿こしに乗った人に会いました。

「あめわかひはどこにいますか」と、娘がたずねると、その人は、

「この先に、瑠璃るりを敷いた地面に玉で飾った御殿があります。そこへ行ってみなさい」と教えてくれました。

娘は、御殿まで来ると、

「あめわかひはどこにいますか」と、声をかけました。すると、中から、あめわかひが出てきました。ふたりは、大よろこびで、いっしょに暮らし始めました。

あるとき、あめわかひがいました。

「あした、わたしの父がやって来る。じつは、父は鬼なのだ。あなたが見つかったらと思うと、心配でたまらない」

娘は、おどろきましたが、今さら地上に帰ることもできないし、なるようにしかならな
いと、心を決めました。

次の日、鬼がやって来ました。娘は隠れていました。鬼は、
「くさいぞ、人間のおいがするぞ」といいながら、帰って行きました。

それから、鬼は、御殿にやって来ました。あめわかひこは、そのたびに、娘を扇おむぎに変えたり、枕まくらに変えたりして、鬼をごまかしました。

ある日、鬼が、音もたてずにこっそりやって来ました。あめわかひこは、娘を隠すひまがありませんでした。鬼は、

「これはだれだ」とたずねました。あめわかひこは、

「下の世界からやって来たわたしの妻です」と答えました。鬼はよろこんで、

「では、おれの召し使いにしよう」といって、自分の屋敷に連れて行きました。

鬼は、娘に、

「野原に、牛を数千頭飼っている。それを、朝、野原へ連れて行き、夜は一頭残らず牛小屋に連れて帰るんだ」といいました。娘は、あめわかひこに、どうすればいいか相談しました。すると、あめわかひこは、自分の着物のそでをほどいて、娘にわたし、『あめわかひこのそで、そで』といって、ふるといい」と教えてくれました。

娘が、朝、牛小屋に行つて、そでをふりながら、

「あめわかひこのそで、そで」というと、数千頭の牛はみな野原に出て行きました。そして、夕方になると、一頭残らず帰って来ました。鬼は、それを見て、

「なんと、ふしぎなことだ」と思いました。

次の日、鬼は娘に、

「わしの倉に、米が千石せんごくある。これを別の倉に移し替えよ。ひとつぶも落とすな」といいました。娘は、倉を開けて、

「あめわかひこのそで、そで」といって、そでをふりました。すると、たくさんのありが集まって来て、あつというまに米を運んでしまいました。鬼が、米を数えると、一粒たりません。

「一粒足りないぞ。見つけてこい」

娘が一生懸命さがすと、腰の折れたありがいつびき、米を運べないのを見つけてきました。娘はよろこんで、その米粒を持って帰りました。

次の日、鬼は、

「むかでの倉に、七日のあいだ、入っておれ」といって、娘を、大きなむかだが五千匹もいる倉にとじこめてしまいました。娘が、

「あめわかひこのそで、そで」といって、そでをふると、むかでたちは、みな、すみに

集まって、娘を襲^{おそ}って来ませんでした。七日たつて倉を開けると、娘は何事もなかったかのように出てきました。

鬼は、こんどは、娘を、へびの倉にとじこめました。娘が、
「あめわかひこのそで、そで」といつてそでをふると、へびは、いつぴきも娘の側に寄つて来ませんでした。七日たつて、倉を開けると、娘は、何事もなかったかのように生きていました。

鬼は、あきらめて、

「しょうがない。おまえたちを許してやろう。けれども、元のように会うのは、月に一度だけだぞ」といいました。ところが、娘は、聞き違えて、

「年に一度だけだとおっしゃるのですか」とききました。鬼は、

「おまえがそういうなら、年に一度だ」といいました。そして、うりを取つて投げつけると、それが天の川になりました。娘は七夕星^{たなばたぼし}になり、あめわかひこは彦星^{ひこぼし}となつて、年に一度、七月七日に会うようになったということです。

村上郁 再話

資料 『御伽草子集』新潮社 「天稚彦草子」